

私の国際化



本林 理郎
JBCCホールディングス
取締役

今でこそ若い人たちは国際経験が豊富ですが、私にとっての初めての赤ゲツ体験は日本アイ・ビー・エムに入社5年目の1965年でした。会社から命じられた2ヶ月のニューヨークでの研修は、解らない英会話、難しいコンピュータ知識、食欲をそそらない洋食と三重苦の試練でした。降り立ったケネディ空港で、「モトバヤシさん、ホテルはどこですか」とタクシードライバーから声をかけられ、アメリカというのはやはり人々を遇するのが上手だなど思いながら乗車、ホワイト・プレインズのホテルまで通常の3倍ほどの料金を支払いました。旅行鞆に大きくローマ字で名前を書いていたので白タクの常習犯にカモにされたと後でわかり、リスクマネジメントの良い勉強になったことが忘れられません。しかしその見事な騙し方にはいまだに感心するばかりです。

● ● ●

初めてのアメリカは驚くことばかりでした。ハードウェア面ではとにかく広いこと、大きいこと。ソフト



ウェアでは今で言うダイバーシフィケーションです。異文化や異なった経験を持ついろいろな人達が堂々と自由に勝手な意見を言い合いながらも他者を認めるという、バランス感覚のすばらしさも印象的でした。外国の事情よりも自国の文化・歴史等をよく知らなかったことに恥ずかしい思いをしながら、狩猟民族にも穏やかな人がおり、農耕民族にもすぐ激昂する人がいて、人間あまり変わらないなとも思いました。人とのつきあいは、良いところだけ見てつきあうと、その後の人生観にも影響を残した初めての海外体験でした。現在勤務しているシステム構築のソリューション会社であるJBCCでも、価値観や意見、年代の異なる人との会話を楽しんでいます。

● ● ●

写真は、羽田空港で両親、妻と生まれたばかりの長男に見送られ、月世界に飛び立つような気負った気持ちでいたことが懐かしい1枚です。